平成１９年度　文部科学省委託事業

総合的な放課後対策推進のための調査研究
放課後子どもプランの取組

事業の区分
（2）放課後活動支援モデル事業ー地域特性等を踏まえた取組

活動事例紹介
「過疎中山間地域での放課後子どものプランの活動実践」から見えてきたこと。

福島県鮫川村

特定非営利活動法人　あぶくまエヌエスネット

目次

事業計画概要・・・１

事業の意義・・・明治大学農学部経済学科　竹本田持先生より
・・・４

鮫川村について・・・１１

受入先小学校・・・青生野小学校　校長　安齋好孝先生より
・・・１２

活動事例紹介
「過疎中山間地域での放課後子どものプランの活動実践」から見えてきたこと。鮫川村、ＮＰＯ法人あぶくまエヌエスネットでの取組
１、子ども教室「放課後自遊教室」の実施　【実 施 日】 週2回放課後･･･13
２，週末地域サポート事業の実施　【実 施 日】 週末･･･21
３，わくわく交流事業の実施　【実 施 日】 長期休業中･･･28

過疎中山間地域での子ども達への体験活動教育の意義と今後の考察
（福島県教育委員会、体験活動体系化に関する資料ページより抜粋）
・・・３５

福島県小学校校長会　会報原稿掲載・・・４１

付録
ＮＰＯ法人あぶくまエヌエスネットについて

事業計画概要　（本事業を提出した際の書類です。）

１　団体名　特定非営利活動法人　あぶくまエヌエスネット

２　事業の区分　(2)放課後活動支援モデル事業　地域特性等を踏まえた取組

３　事業の目的テーマ

『過疎地域における放課後対策事業の実施～土、自然にふれあう活動をとおして～』

過疎中山間地域の子どもの居場所を確保し、集団遊びや体験をとおした人間形成をすすめる。特に、土や自然にふれあう体験や地域の大人との交流、山村留学等に来る子どもたちとの交流をとおして、子どもたちの豊かな心をはぐくむ。

４　事業の背景・必要性

１）放課後、子どもたちが下校すると近くに遊ぶ友だちがいない。（過疎地の特徴）

２）両親の共稼ぎと地域の高齢化により、子どもと地域の関わりが弱体の傾向にある。

などにより、過疎地であればあるほど、子どもたちは集団や学年の違う子どもたちと遊ぶ機会や自然に親しみ自然の良さを感じる機会が少なくなってきている。その結果、コミュニケーション能力の低下を招き、自分の考えをうまく相手に伝えたり、集団の中でうまく人間関係をつくったりすることが苦手な子どもが増加している。また、地域の環境をないがしろにする行為を平気で行う子どもも多くなってきている。

そこで、学校を放課後の活動場所とし、集団で土や自然にふれあう体験をとおしながら、将来地域を担う子どもたちのコミュニケーション能力や規範意識の向上を図る必要がでてきている。

５　事業の実施内容・方法

鮫川村立青生野小学校の児童を対象として、

１　子ども教室「放課後自遊教室」の実施

【実 施 日】　週2回放課後

【実施内容】　集団による遊び、土や自然にふれあう体験および活動

２　週末地域サポート事業の実施

【実 施 日】　週末

【実施内容】　過疎化、少子高齢化が進むこの地域で、子どもたちが高齢化した農家での援農活動を実施し、地域との交流及び地域の中で自分たちの必要性を感じさせる。

３　わくわく交流事業の実施

【実 施 日】　長期休業中

【実施内容】　日頃ふれあうことのない他地域の子どもたちとの交流

６　実施方法

当NPO法人・行政区長・県教育委員会（県南教育事務所ボランティアセンター）が連携を　図り、地域や子どもたちのニーズに適合した良質なプログラムを提供、実施する。

７　事業の目標とする効果・成果

１　遊びの中から社会性を身につけ、自然、地域や人を敬い集団の中でうまく人間関係をつく　れる子どもの育成

２　多くのおとなが、事業に参加することにより、子どもを見守る目や地域を見つめる目も増　　え、地域の力の向上になる。

８　事業の実施スケジュール

実施時期	実　施　内　容
7月 ～2月 月1回	・子ども教室「放課後自遊教室」の実施　週2回　年間57回の実施 ・週末地域サポート事業の実施　週末　年間30回の実施 ・わくわく交流事業　長期休業中　年間10回の実施 実行委員会の開催

９　事業の実施体制

（1）団体の構成

氏　名	職　名	当事業における担当内容
進士　徹	NPO法人あぶくまエヌエスネット　理事長	放課後における児童直接の関わり指導と安全管理、全体監督

（2）協力機関

機関名	機関の所在地	当事業における担当内容
青生野小学校 青生野行政区 福島県教育委員会 県南教育事務所	鮫川村渡瀬青生野 鮫川村渡瀬青生野 白河市	地域事業実施機関 地区の代表区 体ボラセンター

（3）事務担当者（文部科学省との連絡担当者）

氏　名	所属・役職	連絡先
進士　徹	NPO法人あぶくまエヌエスネット　交流事業部	住所：福島県東白川郡鮫川村赤坂東野字葉貫57 電話・FAX 0247―48－2508 E－mail　abukuma@basil.ocn.ne.jp

農村における子どもの体験教育について（私見）

明治大学農学部　竹本田持

１　はじめに

2008（平成20）年度より総務省、文部科学省、農林水産省の「子ども農山漁村交流プロジェクト～120万人・自然の中での体験活動の推進～」が始まります。このプロジェクトは、基本方針として「学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識などを育み、力強い子どもの成長を支える教育活動として、小学校における農山漁村での長期宿泊体験活動を推進する」ことを掲げ、全国23,000校が体験活動を行えるよう農山漁村側の受入施設を整備するとともに、全国組織としての推進協議会を設立してソフト面の体制整備を図ろうとするものです。

3省が関わっていることは、地域活性化（総務省）、子どもの教育（文部科学省）、農林漁業と農山漁村の振興（農林水産省）という複合的目的を有していることを意味します。もちろん、これらの目的がすべて整合性をもつとは限りません。子どもたちにとって望ましいことが、常に農林漁業や農山漁村の振興方策と一致するわけではないからです。しかし、教育、農林漁業、地方自治体やコミュニティなど、それぞれ多くの課題を抱えている現状において、都市と農山漁村、消費者と生産者、大人と子ども…などの交流が深まることに対する期待はますます大きくなっています。交流とは、本来的には交流主体自身、すなわち各地域、学校、地域住民、その他関連組織が自立的、主体的に取り組むべきですが、まずは国主導で実行して推進上の問題点を探り、工夫と改善策を検討しようというのが今回のプロジェクトだと思います。

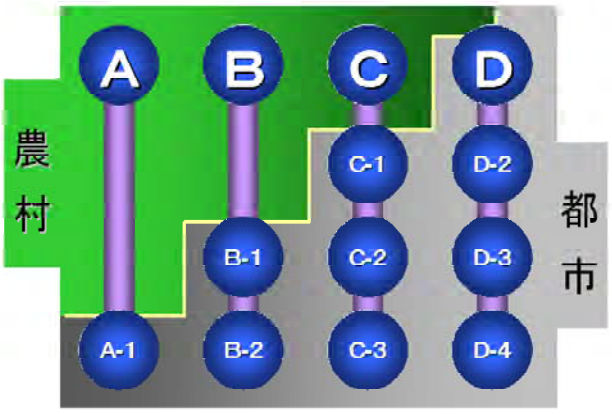
このように、新たなプロジェクトは、農林漁業・農山漁村と子どもの交流を核としています。現段階において、農山漁村における子どもの体験がもつ意味、効果を考えることは有効です。その実践者の一人である進士徹氏は、時代を先取りしてきたと表現しても決して過言ではありません。進士氏の取り組みも念頭に置きながら、以下では私個人の意見を述べたいと思います。ただし、私自身は教育について全くの門外漢であり、無知や勘違いによる雑駁な内容となってしまうことを最初にお断りしておきます。以下では、農林漁業は農業、農山漁村は農村と略記します。

２　高度経済成長期の子どもたちー自己の体験をもとにー

私は教育を学問として考えたことはないのですが、大学教員として実習を担当し、また二人の娘の父親として「子どもの教育」について考えてきました（少し無理がありますが、大学生も含みます）。また、当たり前のことですが、私自身も「子ども」だった時期があり、いろいろな体験をしてきました。まず、

自分自身の経験をもとに述べてみましょう。

図1　都市住民と農村との多様なつながり



映画「ALWAYS～三丁目の夕日」は、東京タワーが完成する1958年が舞台となっています。その前後から日本はめざましい経済成長期に入り、64年の東京オリンピック、70年の大阪万国博覧会、72年の札幌冬季オリンピックと次々に大きな国際イベントが開催されました。食べものも、58年に日清チキンラーメンが発売された後、70年にケンタッキー・フライドチキン、ファミリーレストラン「すかいらーく」が開店、71年にはマクドナルドが開店、さらに日清カップヌードルが発売されるなど大きく変化しました。農業では1961年に農業基本法が制定され、その成否はともかく農工間格差の解消に向けた政策が本格化しました。なお上記ALWAYSには集団就職列車が登場しますが、農村から都市への一方的な人口移動が続いた結果、万国博と同じ70年に過疎地域対策緊急措置法が制定されたことは、表裏の関係として象徴的な出来事だったと思います。

60年～70年代の小学生は、農業・農村とどのような接点を有していたでしょうか。正確には資料に基づいて述べるべきですが、ここでは都内の小学校に通っていた実体験をもとに紹介します。わが家の周囲には全く農地はなく、町会長のような旧家を除けば小さな家が密集し、その中に町工場が点在する「僕らの町は川っぷち」（作詞：峯陽）の歌詞がピッタリの町でした。ところが、小学校の校庭にはブロックでつくった小さな田んぼがありました。田植えと収穫をしたのが何年生だったのか覚えてはいませんが、同じく校庭で育てたヘチマとともに数少ない作物との接点です。

同級生には、地方に「田舎」があって夏休みに帰省する人が数多くいました。父方の祖父母と同居し、母方の祖父母も同じ町内に暮らしていたわが家は帰省する場所がなく、夏休みに出かけるのは保養所や民宿に泊まっての海水浴くらい。ただし私が特殊であったのは、毎年夏休みに新潟県湯沢町へ剣道の合宿に出かけたことです。旅館から稽古場所である小学校（分校）の体育館までは、水田に挟まれた道を歩いて往復していました。ちなみに当時の湯沢町は、駅の近くにも水田が広がり、現在のようなリゾート地とは全く別の静かな町でした。また、幼稚園では芋掘りや潮干狩り、観光もぎとり園、牧場などに出かけたこともあります。

このような経験は、本格的な農業・農村体験とはほど遠いものです。農村で暮らす人々との交流、生活体験が全くなかったからであり、この点が夏休みに

帰省する人たちとの決定的な差でした。もちろん、帰省した子どもたちが農作業を手伝っていたとはいえませんし、むしろ手伝った人は少数派だと思います。代わりに私の場合、農村生まれの祖父母と同居していましたし、親世代が戦時中に農村への疎開経験をもっていましたから、直接的なつながりは希薄であるものの、ほんの少しだけはあったといえるでしょう。そもそも東京のような都市は、農村部から集まってきた人々によって形成されたのですから、数世代か前は農村につながることが多く、いつ都市に出てきたかで帰省先の有無が異なります。こうした事情を単純にモデル化したのが図１です。

もう一つの経験を記せば、1970年頃、近所の土木工事現場に高知県の農村から出稼ぎに来られていた男性がおり、偶然にも私と同年齢の息子さんがいるということで短期間の文通をしたことがありました。何度かの手紙のやりとりで「いつか高知県へ行ってみたい」と思いましたが、私が無精で長続きしなかったのが悔やまれます。ちなみに、このような貴重な経験をした人は少ないと思います。

こう記していくと、上滑りではありますが東京の下町で生まれ育った私も、農業・農村との接点を少なからずもっていることがわかります。ただし、上述したように「人」との接点が希薄であったこと、場当たり的で学習としての経験ではなかったこと、そして継続性をもたなかったことが指摘できると思います。

３　農業・農村体験の効果

上述したように、私は学生の実習（ファームステイ研修、農村調査実習）にも関わっています。その実績等について詳しくは別稿（竹本田持「大学における学外実習教育の現状と課題」『わが国における農村型ワーキングホリデーの実態と課題』農林水産政策研究所、2005年）に譲りますが、多くの学生が有益かつ忘れられない時間を過ごすことができ、学科としても農家での宿泊実習が受験生へのアピールポイントになっています。

大学生を「子ども」とするのは無理がありますが、農家宿泊実習のレポートを読むと、農業経営の内容、農作業、農協や市場との関係などについての記述とともに、家族とのふれあいに関する感想や御礼が書かれていることが目立ちます。作業は初めてのことばかりですし、作物や家畜のことなどが強調されるかなと思うと案外違っていて、家族がともに食事をし、団らんの時間を楽しんだことに感動したというような記述もあるのです。

小学生に代表される子どもにとっても、この点は同様ではないでしょうか。さまざまな体験が重要であることは間違いないのですが、「人」とのつながりが子どもの成長を支えることにつながるのだと思います。例えば小学校には、校長先生をはじめとする多くの先生方、事務職員の方、さらに自校給食なら‘

給食のおばさん’など多くの「人」がいます。このうち最も身近なのは担任の先生ですが、先生と生徒の関係を双方の気持ちでみると、先生からは先生一人に対してクラスの子ども全員なのに、生徒からは生徒一人に対して先生一人というギャップが存在しています。そこに何らかの補足や支援が必要になります。

前項で、高度成長期における都会の子どもが農業・農村とどのような関わりを有していたか、自分自身の経験をもとに述べましたが、もう一つ大切なことが地域の人々とのつながりです。まさに、この点が学校における先生と生徒の関係がもつギャップを埋めるのです。ALWAYSでも題名と同じ「三丁目」の人々が、子どもたちと関わりをもつ姿が描かれていました。具体的に数値として示すことはできませんが、現在では地元の子どもに対して大人たち「他人」が関わりをもつことはほとんどありません。

ところが、農村で体験学習を受ける子どもたちは、農家のおじさん、おばさんの話をきちんと聞き、指示に従って作業をするのだそうです。環境が変わり、いつもとは違った感覚だからこそかもしれませんが、子どもは「人」との関係をいつも排除する存在ではないのです。むしろ積極的に関わろうとする子どもが少なくないと思います。

ここまで述べたことを合わせると、高度成長期の都会の子どもたちは、一方で農業・農村と何らかのつながりをもちつつ、もう一方で地域内での「人」とのふれあい、交流を有しており、後者は農村にも通ずるものだったのだといえます。だからこそ、決して豊かとはいえない生活環境の中にも温もりや人の和があったのではないでしょうか。

この点で、農村は優位性をもっています。すなわち、農業とのふれあいが目の前にあると同時に、地域内での「人」とのふれあい、交流が都会よりも濃密であるからです。ところが、以前のように農家の子どもが農作業を手伝うことはなくなりました。私自身が30年前に宿泊実習をした農家では、トマトジュース原料となる加工用トマト（現在はジュース用トマトと称します）をつくっていました。真夏の炎天下、朝から晩まで順番に赤くなるトマトを取り続けるのですが、当時は家族や親戚総出の収穫作業で、小学生の子どもも休憩時間の前後には畑にやってきて手伝っていました。そうした姿は数年後には潮が引くように失われ、畑にいるのは一人か二人という状況になってしまったのです。

同様に、地域内での「人」とのふれあい、交流も、農業をめぐる情勢が厳しさを増していく中で徐々に希薄化しているように思います。都市に比較すれば、そのつながりはまだ残っているのですが、このままでは農村の優位性が失われてしまうかもしれません。

４　今後の課題

思うままに、子どもの体験教育について述べてきました。今後さらに推進していくための課題を二つだけ指摘しておきましょう。

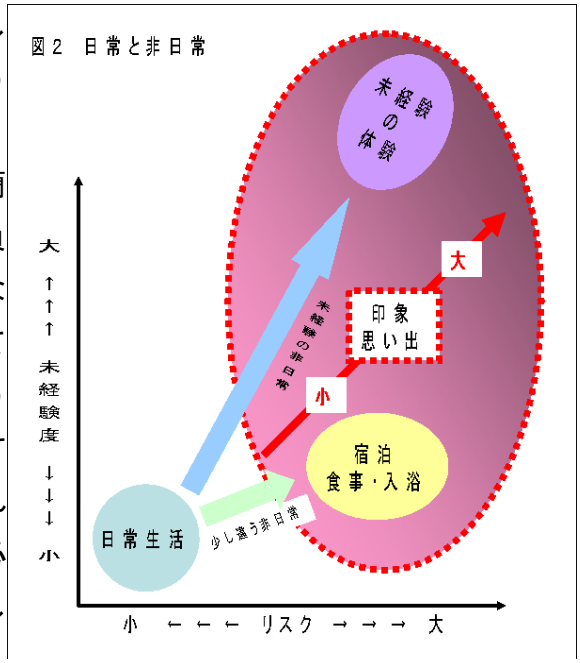
一つは、農村における体験学習だけの問題ではないのですが、引率する教員、受け入れる農家・農村と体験する子どもたちの立場の違いです。引率教員、農家・農村は、繰り返し体験学習を実施していると慣れたり、マンネリ化したりします。ところが、子どもたちにとって体験学習は一度だけのことが多く、前年度や次年度の内容は関係ありません。それを忘れてしまうと、良かれと思った対応が逆効果になることもあります。教育とは、教育を受ける側は一回だけであるという意識を常にもつことが大切になります。もちろん、子どもたちが同じ場所で繰り返し体験学習をするような場合には、前年度との関係や、次年度へのつながりも考慮したメニューの多様化や工夫が有効です。

もう一つは、子どもたちにとって、いつもと違う場所に行き、教室ではないところで、担任の先生ではない人から教えてもらうことは、すべてが非日常的であることです。非日常的なことは、どうしてもリスクが高まります。リスクを排除しようとするなら、せいぜい新鮮な空気を吸い、美しい景観を眺めて食事をする程度が精一杯になります。厳密には、食事もアレルギーなどのリスクがありますので注意が必要ですし、新鮮だと思う空気で何らかの影響が出ることも皆無ではありません。

これらに過度に神経質なれば、体験学習は実施できないことになります。図２は、このような関係を模式化したものです（竹本田持「農家民宿における安全管理の必要性」『農林漁業体験民宿安全管理等調査報告書』都市農山漁村交流活性化機構、2007年）。リスクを小さくするなら、できるだけ原点に近いところに止まらなければならず、日常生活から離れることができません。つまり、どこにも行かないか、行っても何もしないことです。ところが、人間にとっての感動や印象、思い出は、刺激が大きいほど強いものになりますから、ある程度のリスクがないと体験学習の効果が小さいものになってしまうのではないで

しょうか。

例えば、軽トラックの荷台に子どもたちを乗せて畑に行く。これは厳に慎まなければならないことです。しかし、誤解を恐れずにいえば、さわやかな風を受けながら軽トラの荷台に乗ることは子どもたちにとって忘れがたい思い出になることは間違いありません。こうしたリスクと思い出との相関にどのように対応するかが大切です。



ここで指摘したことは、いずれも簡単なことではありませんが、引率教員や受入農家だけに任せることはできないと思います。大きくは、制度として体験学習に伴うリスクを負担するような新たな保険などが必要だと思いますし、同時にこうしたことを考えてくれるスタッフが地元に存在することが必要ではないでしょうか。冒頭に紹介した「子ども農山漁村体験プロジェクト」においては、体験学習の推進や支援について説明がされていますが、ここで述べたような点への配慮が加わることで、さらに効果的な取り組みとなると思います。

最後に、本稿では「子どもの教育」「子どもの体験」という点に限定して述べてきましたが、それを受け入れる農村側の問題について触れておかなければなりません。農業のもつ多面的機能の一つとして、子どもたちに対する教育力に期待が寄せられています。しかし、子どもたちの体験教育は、土に触れ、動植物に触れるだけでは完結しません。結局、子どもたちと接するのは「人」だからです。農家の人々に圧倒的なゆとりがあり、ボランティア的に対応してもらえるのなら良いのですが、実際には農業を取り巻く情勢は厳しさを増しています。

子どもたちの親は、日々少しでも安い農産物を求め、一方で日本の農村での体験活動に期待するのは身勝手だと思わざるを得ません。子どもたちの成長にとって体験活動は大切ですが、それ以上に新鮮で安全、美味しい食べものが不可欠です。わが国の農村が、これからも食べものを生産・供給し続けることができるよう、消費者である親自身が考え行動して欲しいと強く思います。

竹本田持先生　プロフィール

明治大学農学部教授。

1958年東京都生まれ。

明治大学大学院農学研究科修士課程終了。

財団法人過疎地域問題調査会研究員、明治大学農学部助手、講師、助教授を経て現職。

博士（農学）。この間、英国シェフィールド大学客員研究員、社団法人日本アグリビジネスセンター、財団法人都市農山漁村交流活性化機構などの委員を歴任。

現在、川崎市「かわさき農の新生プラン推進会議」会長、青森県板柳町「りんごの里」アンバサダー。

「活動場所の環境は？」福島県あぶくま南部高原　鮫川村

交通アクセスは、常磐自動車道、勿来インターより国道２８９号線を上り、国道３４９号線の２本の国道があります。

首都圏から約２時間３０分の位置にあります。

東北地方の玄関口にある福島県鮫川村は阿武隈山系の南端、頂上部にあるため山脈丘陵が連なり中山間標高４００～６５０mの範囲にあります。

いわき市、棚倉町、古殿町、塙町に隣接しています。緩傾斜地の多くは採草放牧地に利用されています。和牛の飼育が盛んな地域です。

源流の場所でもあり鮫川・久慈川・阿武隈川の分水嶺になっています。

夏過ごしやすく熱帯夜はまずありません。日本で３番目に星が綺麗に見られる環境にあります。逆に真冬には雪はそれほどありませんが氷点下１０～１５度程度になる自然環境の厳しいところでもあります。

東京と同じ「赤坂・中野・新宿」とユニークな地名があることでも知られている村です。

人口は、昭和３０年には最大で8，000人がピーク。高度経済成長に伴い人口の都市部への流出は本村も同様でした。平成１９年現在人口は4，300人であり少子高齢化に拍車がかかる傾向にあります。

平成の大合併をしない村として「豆で達者な村つくり！」を打ち出し農業を主軸に元気のある人材育成と、地場産業の掘り起こしに着手しています。

放課後活動支援モデル事業ー地域特性等を踏まえた取組について

鮫川村立青生野小学校
校長　安齋好孝

現在，子どもたちの安全や健全育成の面から，家庭の教育力とともに地域の人々との交流・コミュニケーションを図った地域の教育力が強く求められている。

国や県としても，放課後児童健全育成事業（放課後児童クラブ）や放課後子ども教室事業等を推進している。

しかし，本校は，へき地校であり，児童数も少なく，児童の住居も点在している実態や事業を実施する場所や指導者の確保等の人的・ハード面からも，それらの施策の実施はなかなか困難な現状がある。

そういった現状の中，「NPO法人あぶくまエヌエスネット」の活動として，毎週火曜・木日の放課後に，複数の大人や青年たちが遊学として本校を訪問し，子どもたちとふれ合い，コミュニケーションを図ってくれていることは，子どもたちにとって，楽しさとともに社会性を育てていく上で，とても有意義なことであると感じている。

しかし，本校の現状として，安全面から，一斉下校を毎日実施しているため，放課後の時間に制約がある。したがって，自由に遊ぶ子どもたちの姿は，あまりない。そういったことから，普段，保護者や学校関係以外の人々と触れあう機会の少ない本校の児童にとって，「NPO法人あぶくまエヌエスネット」さんの人たちが来るこの時間は，たいへん貴重であり，同時にとても楽しみにしている。

子どもたちは，遊びの中で学ぶことがたくさんあり，子どもたちの自由遊びの中に，大人が関わり，社会性を身につけていくことは，これからも重要なことであると思っている。　子どもたちが，「NPO法人あぶくまエヌエスネット」さんの人々と大きな歓声をあげながら遊んでいる様子や笑顔で話している姿を見ていると，感謝とともに，この活動のすばらしさを改めて認識している現在である。

また，子どもたちの自主性を大切にしながら，遊びの中で，ルールやよくない行為をした子どもに対しては，毅然とした態度で注意をしたり，しかってくれていることは，子どもたちの社会性を育てていく上で，大切なことであると思っている。

現在，この活動に参加しているのは1，2年生中心であるが，もう少し活動回数を増やしたり，参加学年の範囲を広げていければよいと思っている。

多忙の中，本校の実態を踏まえ，本校の支援をいただいている「NPO法人あぶくまエヌエスネット」さんの活動に対し心より感謝するとともに，子どもたちの健全育成ために，今後の活動内容等についてさらに協議しながら，支援を継続していただくことをお願いしたい。

子ども教室「放課後自遊教室」活動記録写真　　青生野小学校

青生野小学校の理念＆校歌

何気ないことも遊びに・・・

鉄棒で遊ぶ

ジャングルジムで

韓国人研修生といっしょに！

高校生ボランテイアに甘える子ども

ドイツ人研修生といっしょに

鬼ごっこ終了！！

笑顔

笑顔

ジャングルジムで遊ぶ

力くらべ

鬼ごっこ

鬼ごっこ

ボール遊び

雪遊び

雪遊び

雪遊び

子ども教室「放課後自遊教室」活動日　総計５７日間

７月＝６日間　３／５／１０／１２／１７／１９
８月＝２日間　２８／３０
９月＝９日間　４／６／１１／１３／１４／１８／２０／２５／２７
１０月＝９日間　２／４／９／１１／１６／１８／２３／２５／３０
１１月＝９日間　１／６／８／１３／１５／２０／２２／２７／２９
１２月＝６日間　４／６／１１／１３／１８／２０
１月＝８日間　８／１０／１５／１７／２２／２４／２９／３１
２月＝８日間　５／７／１２／１４／１９／２１／２６／２８

「次世代へのメッセージ・・・活動を通じて育った子どもたち」

「活動内容とその成果」

この放課後子どもプランが立ち上がって、学校も第３者を受け入れ、ある意味開かれた学校になったといえます。

子どもとの関わりは「指導しない指導を徹底しました。」
大人の先行する遊びの伝達や指導ではなく、子どもの遊びの世界に大人が、仲間として関わる手法です。その関係は子どもにとってとてもリラックスした関係を作りました。
学校の先生とは違う、身近に接してくれる気軽な大人の存在です。

活動日に学校を訪れると子どもたちは早く教室から出て遊びたくて、笑顔い

っぱいで校庭に出てきます。
　我々の呼び名はニックネームであったり、名前です。「ぽんた・・・ゆみこさん・・・うーちゃん・・・」呼び方や言い方でも親しみ方が違う事を感じます。

遊び人気ランキング＝第１位　鬼ごっこ「高鬼　増やし鬼　色鬼」
第２位　けいどろ（警察と泥棒）鬼ごっこの一種です。
第３位　陣地とり
第４位　ジャングルジム
第５位　ジャンケン遊び

まさに「遊学」
　子どもたちは遊びの中から多くを学んでいきました。その変化は少人数で常にいることから、自分勝手がはじめは目立っていました。
・思い通りいかないとすぐ泣く。もしくはかんしゃくを起こす。
・鬼ごっこで、友達に相談無く勝手にルールを自分の都合良いように変えてしまう。
　活動を重ねる事に徐々に良い方向での変化が生まれてきました。

・我慢すること、泣く回数が減りました。
・友達に譲ること。協調することが身に付きました。
・みんなで楽しく！！遊ぶことに工夫しはじめました。

　また外国人研修生との交流も自然体の中で行われました。
　我々のＮＰＯには外国人研修も受け入れているため３ヶ月～半年にわたり研修する中で、この事業にも関わっています。ドイツ、韓国人青年など子どもたちにとって、とても良い関係を構築しました。
　まず言葉の違いです。ドイツ語や韓国語での挨拶はなんて言うの？？
他にもいろんな質問を投げかけていました。興味を持ち質問を自発的にすることはすでに学びになっています。
　外国人を見る機会など少ない環境ですが、子どもたちにとっては刺激になり、その場にいっしょにいることが、はじめは恥ずかしい気持ちですが、慣れてくると違和感なく普通に接し遊ぶ姿はとても良い光景でした。

　先生方はなかなか子ども達といっしょに遊び時間を見出すことが難しい様子の中、我々が関わった事で笑顔と元気な声が学校中に響き渡っていました。
以上が子ども教室「放課後自遊教室」の成果を上げてみました。

週末地域サポート事業　活動記録写真

話し合い

農園

鹿角平高原にて

滝に行って遊ぶ

農作業　野菜苗の定植

昼食の自分達で作りました。

農作業

機械操作見本

果樹植樹

ピザ焼き

ピザトッピング

記念に・・・パチリ

泥団子制作

自炊　ボランテイア学生

山で遊ぶ

手作りのアスレチック

手作りアスレチックで

週末地域サポート事業活動日　総計３０日間

７月＝４日間　１４／１５／２１／２２
８月＝６日間　５／６／１８／１９／２５／２６
９月＝５日間　１／８／９／２２／２３
１０月＝５日間　１３／１４／２０／２１／２８
１１月＝４日間　１０／１１／１７／１８
１２月＝２日間　８／９
１月＝４日間　５／６／２６／２７
２月＝０日間

「週末地域サポート事業の・・成果として考えられる事項」

「週末における子ども達の生活現状」

・農山村の環境にあり比較的自然に恵まれた地域ですが、その地域の特性を充分に活かした子どもたちが週末を過ごすということは、ほとんどありません。

また村教育委員会主催による子ども体験プログラム「チャレンジスクール」が月１回程度行われていますが、親の送迎が余儀なくされるため時間的に余裕がないとなかなかその活動への参加が難しいのが現状です。

・家庭にいる時間がほとんどであり、家の手伝い程度はやりますが子ども対同士が集まって遊ぶことはほとんどありません。

・家での遊びのほとんどはゲーム機であったり受動的な遊びになっている現状です。

・塾や稽古事など環境的にも遠方になるためその関わりはほとんどありません。

「活動内容：農山村の生活に根ざした内容を軸に活動を積み重ねました。」

・山に入って遊び場を作りました。アスレチック的なものですが、その作った遊び場を大切に使います。

・田んぼ、畑での農作業　果樹植樹　機械操作　収穫

・食育活動としては、石窯オーブンによるピザ作り、釜戸での自炊。餅つき他

・薪割り、火起こし

・自由遊び

「事業の成果」

・環境の大切さ：充分な施設完備を備えている訳ではなく、昼食にしても自炊をしました。

釜戸を使うため、薪が必要になります。その薪が不足すると山から取ってくるところから始まります。

・参加した子ども達は、この活動は自主的活動で一人一人が実に楽しんでいました。

・時々ですが親も一緒に参加してくれました。親は子ども達が集う場所や時間は大切だという自覚を持って参加してくれました。

わくわく交流事業活動記録写真　　長期休暇期間実施

鹿角平高原にて

自炊活動　けむたーい・・・

自炊活動　ご飯編

みんな元気ですかーー

薪割りレクチャー　安全に！！

ホタルが飛んできました・・・

すずめが・・・

自由遊び

ドラム缶風呂　気持ちいい！

流しそうめん

小川に何か生き物いるかな？

ヤマメゲット！！

ヤマメのつかみ取り

塩焼きに！！命を頂くプログラム

寝袋干し

友達出来たよ！！

友達出来たよ

わくわく交流事業活動日　総計10日間

７月＝２９／３０／３１　３日間

８月＝８／９／１０／１１／２０／２１／２２　７日間

わくわく交流活動を通じて育った子どもたち」

事業の成果として考えられる事項

　日頃ふれ合うことのない他地域の子どもたちとの交流を活動内容に盛り込み実施しました。

長期休暇中に都市部の子ども達を受け入れている我々NPOが、そのような交流の場を提供することで、地域の子ども達にどのような変化があるのか実践から感じ取っ

た事を記します。夏休み期間中に実施しました。

「中山間地域における夏休みの子どもの生活現状」

・両親は共働き世帯がほとんどであり、祖父母と過ごす時間もあるが行動がなかなか一致しない。

・畜産農家世帯も環境的に比較的多い。子どもと共有する時間や、親がいっしょに遊ぶ時間はほとんどありません。

・家の間隔が一件、一件離れているため、自宅での遊びが中心になり、ゲーム機による受動的遊びがどうしても中心になる傾向にあります。

・学習塾もなく自力で学習するか、もしくは兄弟で教え合うか

・野山、川が流れる環境にありますが、子供たち同士が外で遊ぶ姿はほとんど見ることが出来ないです。

・学童保育や児童館は村中心地にはありますが、この地区には全くそのような機能を果たす子どもの居場所はありません。家庭に限定されてしまいます。

・相対的に長期休暇は家にいる時間がほとんどです。

「事業の成果と意義」

・他の地域の子ども達と接する機会はそれほどありません。活動が毎日ではありませんでしたが、野外でも活動を通じて都会の子どもと共有の時間を持ったことは互いに刺激にもなりました。

・違和感なくとけこみ友達が出来ました。

・協力すること、生活を工夫することを自主的に行うことが出来ました。

・楽しげに話をしたり、活動をしたことが何よりも大事な時間でした。

・児童館的な機能が周囲にはなく、このような野外児童館的な居場所があっても良いと感じました。

過疎中山間地域での子ども達への体験活動教育の今後の意義と考察

事業を総合的に振り返りますと、中山間過疎地域における子ども達の置かれている環境は、自然には恵まれているものの、その関わりの薄さや、少子化の影響を真に受けていること。

子どもと関わる身近な大人の存在や、子ども達が気軽に集える場所がどうしても不足しています。心のゆとりも大切ですが、農林畜産業の経済の打撃も影響していると思われます。

この地で生まれ育ち、地域の誇りを子ども達に伝えることは、今の現状ですと非常に厳しい状況下にあります。

その中で今回の事業で放課後、週末活動、長期休暇中の活動を総合的に、過疎地域における子どもの活動を網羅したことは意義深く感じています。

その子ども達との関わり方も安全管理を万全にしながら、自然体で遂行していきました。

身近な存在の大人が必要であることを痛感しました。環境を活かすのも、子ども達とコミュニケーションをはかるにも身近な大人の存在は不可欠です。課題も山積する中で少しでも子ども達の声が、山村に響き渡るような地域環境を、維持継続していくことが必要であるとおもいます。

一年二年の短期間の活動ではなく、村や地域の存在価値を日頃から関わる大人が、身近に接しながら生きる楽しさや、この地の産業である農林畜産の誇りを伝えられ、いずれこの活動のバトンを、今関わった子ども達が引き継いでくれる日まで継続することです。ここに意味があると思うのです。

少人数だから切り捨てられる地域ではいけません。このような地域が輝いてこそ意味があると思うのです。

「子どもにとって望ましい体験活動とは、そしてその関わり方」

体験活動など子ども達に関わる指導者の役割は非常に重要で、指導者の関わり方で、対象者が受ける印象や伝わり方など左右されることになります。

事業の目的や臨機応変に対応出来る人材が必要です。

以下は福島県教育委員会、体験活動体系化に関する資料ページより抜粋させて頂きます。

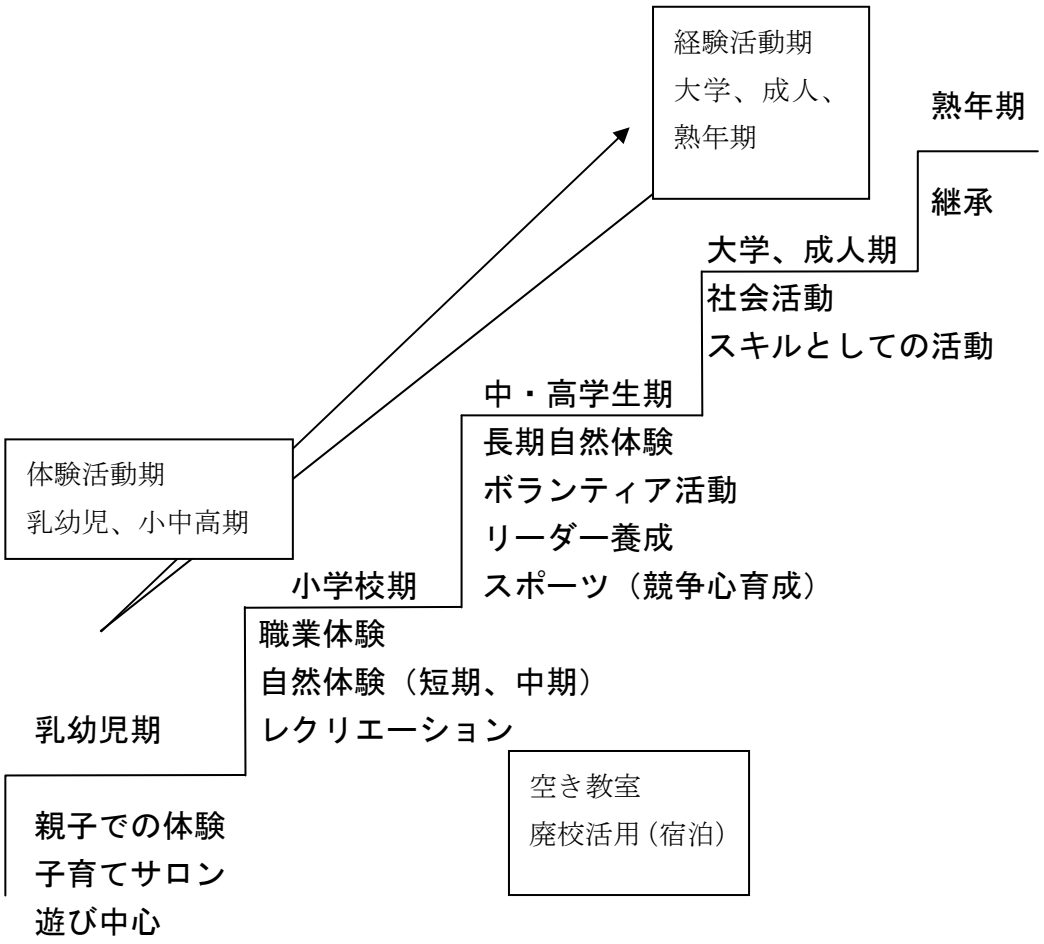
「子どもの発達に応じた望ましい体験活動をすすめるために」というタイトルで体験活動の体系化に関する資料を冊子に分かりやすくまとめた冊子です。私も委員の一人でした。参考にページを抜粋して掲載します。

１　現代の子どもたちに最も身につけ足させたい力は何か。その力をつけるためには、どんな体験活動が必要か。
◎　心身バランスがとれた人としての教育の場を多く設定すること。 人として生まれ、人として生きること、人として「命」を伝える人。の育成である。 ・　自立心 ・　協調性 ・　忍耐力 ・　道徳心 ・　社会性 ・　競争心 ・　思いやり（友人、異性、関わる全ての人） ・　自然から得る感動 ・　自然から得る厳しさ ・　土にふれる ・　異年齢集団から得る 様々な成長段階に応じた体験活動の実践 　野外活動（火起こし、自炊、キャンプ） 　レクリエーション 　スポーツ 　職業体験（職人、地場産業） 　里山、農山村 　創作活動 家庭・学校・民間体験活動家の活用・地域の連携システム構築 民間体験活動家の活用（もりの案内人、認定ツーリズムガイド、自然学校、ボーイスカウト、レクリエーション協会・・・地域の名人・達人）

２　人間性・社会性を育成する上で、子ども達に必要な体験・経験とは何か。
体験：単発のものをこなしていく。 経験：体験を継続的に積み重ね、自身がその体験から得たことを生かし始めたとき。 と考える。 体験活動は非日常化の中にある。 学力重視から本当に人間として大切な心は育たない体験活動の日常化！それを日常化することが緊急を要する。

３　体験活動体験化に向けて（課題、問題点）
・ ゲーム機の廃絶、廃棄運動（物金で親の手抜きをしない。ゲームメーカーは戦争犯罪。ゲーム機で心は育たない。） ・ 核家族化（子育ての悪循環） ・ 子育て支援が子捨て支援　（乳幼児期は親が育てるべき！保育園，公園など**子育てサロン**の環境に） ・ 地域社会の弱体化　連携 ・ 学校社会の地域離れ（学校内に老人施設を老人とのふれあい。**継承教育**） ・ 職業体験（父親、母親の職場訪問＆体験　**親の背運動**） ・ 体験活動の民間活用（行政機関、学校だけでは限界） ・ 教員研修に自然体験を！ ・ 教員免許資格に自然体験を！ ・成長段階における体験活動を体系化する必要がある。３年ごとの修正とスキルアップを図る。

・成長段階における体験活動を体系化する必要がある。３年ごとの修正とスキルアップを図る。



心身の成長段階に応じた体験スキルをイメージし、循環型体験活動「生涯体験交流共育実践」の地域別のシステム化！！の構築をはかることは急務。

参考文献

福島県教育委員会発行

子どもの発達に応じた望ましい体験活動をすすめるために

～体験活動体系化に関する資料～

NPO法人　あぶくまエヌエスネット紹介

「土・自然から学び共に生きよう」をテーマに自然から大きく学ぶ「生涯体験交流共育」という独特の考えの基に、四季折々の山里での体験をとり入れ、体験参加者も地域も世代を超えて共に育つ**「共育」**をコンセプトにしています。

活動の動機：

親子との共有の時間が持ちたかった！！山村生活は初心者マーク！！我が子に安心して口に出来る野菜を食べさせたい！でも全く分からない。地域の人たちみんなが先生でした。鍬を持つ手。四季をうまく付き合う生き方。笑顔で暮らしている人たちから学んだ事は、現代社会の大きな忘れ物を、気づかせてくれたのです。

初めて畑で収穫し小松菜を食べた味は今でも新鮮な事として焼き付いています。まさにそれが感動体験でした。原点に私自身の体験を広めたいと思う気持ちが今につながっていると思います。

【沿革】

昭和63年　山村留学設立　鮫川村生活スタート　都会からの子ども達を受入
平成7年　自然体験学校「ＷＡＲＥＲＡ元気倶楽部」としてスタート
平成9年　体験民宿登録（財）都市農山漁村交流活性化機構　登録番号７００１８号
平成10年　交流部門：「あぶくま自然大学」＆宿泊部門：「WARERA元気倶楽部」
平成15年　ＮＰＯ法人あぶくまエヌエスネット（Nature, School, Network）認証
平成16年　都市と農山漁村の共生と対流推進協議会主催
　　第２回オーライニッポン大賞「ライクワーク賞」受賞
平成18年　ふくしま旅の５０選大賞受賞

「土・自然から学び共に生きよう」をテーマに自然から大きく学ぶ「生涯体験交流共育」という独特の考えの基に、四季折々の山里での体験をとり入れ、体験参加者も地域も世代を超えて共に育つ**「共育」**をコンセプトにしています。

農山村が抱えている課題は年々ふくれあがっている現状です。山里の小さな自然学校から発するメッセージは、単に自然体験にお出で下さい。だけではなく、山村の課題を交流体験から発展的に解決に向かう手法をとっています。それが「生涯体験交流共育」の活動へと促進しているのです。一人でも多くの人が心の感動を持っている事が現代社会に必要なのかと感じます。感動体験を少しでも提供出来たらと思っております。

【事業内容紹介】

①　生涯学習体験交流活動
②　グリーン・ツーリズム事業
③　自然体験活動指導者育成事業
④　体験活動受託事業
⑤　体験活動講師、講演活動
⑥　食と農に関する調査研究実践活動

⑦　農山村地域の伝統的生活様式に関する調査研究及び実践活動
⑧　里山、河川の環境保全に関する事業
⑨　宿泊事業
⑩　農山村や自然体験活動などの雇用機会の拡充を支援する活動
⑪　執筆活動

【活動内容】基幹となる体験交流活動では、社会のさまざまな世代を対象に、鮫川村での体験活動を通じた交流促進のプログラムを企画運営しています。
＊子ども対象
・「里山子どもレンジャー」地域の子供たちが、里山離れしている現状に危機感を憶え、周辺地域の子供たちを対象にしています。
・「ネイチャーキッズ」夏、冬、春休みのプログラムとしてを行っています。横浜のＮＰＯ法人教育支援協会との連携協同事業です。
夏には６００人もの子供たちを迎え入れます。長野県、北海道など徐々に受入る方部も増えている状態です。

＊大人対象
・「大人の山村留学」２泊～２週間程度滞在します。山村生活そのものがプログラムです。
・「女性のためのヘルシー田舎生活体験」２～３泊。薪割り、農作業収穫から調理まで新鮮な食材を口に出来るのが好評です。
・「田舎族養成講座」団塊世代に向けて開講しています。主に男性の居場所事業？の傾向にあります。マイツリーハウス建築をしながら、地域の人と交流を構築しながら時々の２地域居住プログラムです。

＊家族対象
・「週末ファミリーアグリ塾」山里での体験を共有して親子の絆を更に強く構築して欲しい・・・そのようなメッセージのプログラムです。

＊食農体験
・「石窯オーブンピザパン工房」食農実践プログラムで注目されているのが、石窯オーブン！！単に石窯でピザが焼ける、パンが焼ける。ハンバーグが焼けますが、それだけの意味ではなく、山村の環境の悪化を少しでも防ぐための石窯です。
燃料に使う薪は、間伐材。休耕する畑に小麦を蒔き収穫します。そしてスーパーで購入する野菜だけしか分からない子どもも増えています。そんなことから食育的な活動として。石窯オーブンは大活躍しています。

＊動物たちから学ぶ
・犬と鶏の世話が大人気
最近はマンションなどでは犬が飼えないとかで犬の散歩が人気です。犬も散歩してくれる事がすでに理解しているので体験者の方達が来ることを楽しみにしているようです。

また鶏の世話の時に卵採りをします。生み立ての卵は暖かい！！とこれも食育の一つの大切なメッセージです。

【その他の事業】
＊自然体験活動指導者育成事業
活動を担う人材を育てるための事業です。
＊受託事業
行政、公民館、保育園、幼稚園、小学校、企業などの体験学習活動を引き受ける体験活動
＊講師派遣、講演活動教育
教育・農林関係、実践レクチャーなど各種分野へ行っています。
＊環境保全
里山、河川環境の維持保全に関する事業
＊宿泊事業
田舎生活体験の家での体験宿泊も手がけています。

・将来の夢

人間力を！農山村の知恵を子ども達にバトンタッチしたい。

人間力の回復！！元々持っている感性を眠らせている日常に、一人でも多くの子供たちが、たくさんの体験を積み重ねバランスのとれた人間力を身につけて欲しいと強く願います。戦後経済重視で歩んだ日本の汚点は環境を破壊し、人の心の過疎を生んでしまいました。感動体験が一つでもあれば、心豊かに日常生きていれば悲しい事件は防げるはずです。

子ども達に汗をかくこと、土に触れることの大切さを一緒になって伝える「多世代交流のシステム構築」です。

連絡先
ＮＰＯ法人あぶくまエヌエスネット
〒９６３－８４０３　福島県東白川郡鮫川村赤坂東野字葉貫５７
電話・FAX　０２４７－４８－２５０８
e-mail　abukuma@basil.ocn.ne.jp
URL　http://www2.ocn.ne.jp/~abukuma/

活動報告書

平成１９年度　文部科学省委託事業

総合的な放課後対策推進のための調査研究ー放課後子どもプランの取組

事業の区分　(2)放課後活動支援モデル事業ー地域特性等を踏まえた取組

特定非営利活動法人　あぶくまエヌエスネット

理事長　進士　徹

〒９６３－８４０３　福島県東白川郡鮫川村赤坂東野字葉貫５７

電話・FAX　０２４７－４８－２５０８

e-mail　abukuma@basil.ocn.ne.jp

URL　http://www2.ocn.ne.jp/~abukuma/